

Title	第3次予防の医療サービス導入の留意点 - A大学病院ナースによるストーマ外来の事例から -
Sub Title	
Author	山口恭子(Yamaguchi, Yasuko) 河野宏和
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	1999
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 1999年度経営学 第1554号 連絡が必要
Genre	Thesis or Dissertation
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001999-1554">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001999-1554</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

所属ゼミ	河野 研究会	学籍番号	89828915	氏名	山口 恭子
(論文題名)					
<b>第3次予防の医療サービス導入の留意点</b> <b>—A大学病院ナースによるストーマ外来の事例から—</b>					
(内容の要旨)					
<p>本研究では、ナースが提供する第3次予防医療サービスを考察する。近年、日本人の生活様式の変化によって疾病構造が変化し、糖尿病、大腸癌等の生活習慣病、慢性疾患が増加している。病気と共存しながら自己実現を図るというニーズは、今後更に高まることが予想される。</p> <p>当初著者は、持ち出しになる同サービスの代替収入のしくみをどう作るかに関心を持った。偶然A大学病院を調査し、ストーマ外来の歴史が14年に及ぶ事を知り、発展過程での取り組み、ナースらの工夫をまず調査する必要性を感じた。研究目的は、同院ストーマ外来のナース3名の問題意識と活動の内容を示した年表の分析から活動の工夫点を抽出し、同サービスに必要なしくみを作る際の注意点を考察することである。同院ストーマ外来の設置目的は、通常交流のない他の診療科と連携を作り、患者の個別性に配慮し継続的にケアを提供する事である。年表より、活動を3つのステップに分析した。</p> <p>開設当初から院内に抵抗が生じた。第一ステップは、実績を示す必要からストーマ外来のナースたちはまず自分たちにスキルを蓄積した。第二ステップでは、院内のコミュニケーションを図り、ケアの必要性とストーマ外来の利便性を示し、啓蒙活動や他のナースへ教育を行った。第3ステップで、やっと統一マニュアルを導入でき、院内のケアを標準化し情報共有の取り組みが行われた。</p> <p>事例の分析から、同サービスのしくみを作る際、いきなりトップダウンで連携を指示しただけではスムーズにいきにくいと考える。時間の長短は別とし、事例が示唆するようにケアの必要性に対する認識を院内で共有し、初めて質の標準化や情報共有がスムーズになり、サービス生産における連携のしくみが機能しやすいと言える。同サービスを生産するための連携は、地道な努力の積み重ねも重要である。人件費や看護婦資格制度の導入、ボトムアップのパワーといった点から、今後の医療におけるサービスやチーム連携においてナースを有効に活用するメリットがある。これらを踏まえ本論文では医療制度への問題提起、医療機関経営者や看護界への提案もしている。</p>					